

巻頭言

## 環境情報学部の IT 活用の取組と今後への期待

諏訪 敬祐



情報メディアセンターは21世紀の情報化社会にふさわしい最先端のIT環境を備えた施設として環境情報学部の開学と同時に1997年4月に開設され、本学部の中核施設として情報メディアの教育、研究に大きな役割を果たしてきました。同時に本施設内には、図書館が包含され、図書館のIT化も行われてきました。IT環境の向上のため前半の6年ほどは無線LANシステムの設置や演習室の配置などインフラの整備が主でしたが、後半の6年はIT活用のためのサイバーキャンパス事業、教室間連携、遠隔授業及び授業支援システムの導入など利用面において大きな進展がありました。現在までの発展の経緯は本誌TOPICSの「情報メディアセンターの10年」を御覧ください。一方、環境情報学部の情報メディアセンタージャーナルは本年4月発行をもって第10号となります。情報メディアセンタージャーナルは本学部におけるIT活用状況の把握、ノウハウ蓄積及び情報機器を利用した教育、研究成果の発表を目的とする刊行物として発刊されてきました。本ジャーナル第10号では、「環境情報学部情報メディアの今後の10年の展望と期待—ジャーナルと情報インフラの将来に望むこと—」を特集のテーマとして情報メディア系の教員を中心とした座談会を企画し、学部のIT化の現状とこれからの期待について忌憚のない意見をまとめています。次に、サイバーキャンパス事業の総括として関係の教員による海外フィールド研修におけるコンテンツ作成を通じた研修プログラムの実施状況の論文を掲載しました。さらに、卒業研究、大学院の研究成果の論文と教員の研究論文を掲載しています。

情報メディア学科前学科主任をされた山田豊通名誉教授はIT活用におけるPDCAサイクルの手法について本学部紀要10周年記念号で述べられています。環境保全活動と同様にPlan(計画)→Do(実行)→Check(評価)→Act(改善)を繰り返して、大学のITマネジメントを実践する手段です。まず、冒頭で触れたように学部開設時においては、IT活用の基本構想の確立が重要との認識から、情報メディアセンターを設置し、キャンパスのIT化の推進拠点に位置づけました。Planの段階では、IT活用のデザイン、ミニプレラボやグループワークルームの活用の具体化が行われました。Doの段階では、教職員の意思疎通の徹底を図り、運営組織や支援体制が強化されました。この結果、本学部と武漢大学との合同遠隔授業や英語などでのeラーニングを実現しました。Checkでは、IT活用における教育効果の測定、分析を行い、実施報告の形でジャーナルに掲載しました。Actでは、Checkでの評価結果や課題を整理してシステムの更新のための新たな教育用サービスの検討や次期システムの要求条件の明確化を行ってきました。

本学は本年4月からは東京都市大学に大学名が改称され、3キャンパス全体でのネットワークの統合運用が始まろうとしています。まず、認証システムが統合化されるので、ワンストップサービス化の実現に向けて一歩前進というところです。東京都市大学の発足に伴い、世田谷キャンパスの情報処理センターとも連携して情報システムの更新やIT活用を推進していくことになるため新たなPDCAを実践していくことが必要です。また、図書館機能は電子化が一層進むことになるので、ユーザに優しい検索システムや講義内容、教育コンテンツのデジタルアーカイブ化も求められるでしょう。

情報メディアセンタージャーナルは情報メディアに関連する研究論文、調査・実施報告などを掲載し、国内の大学や研究機関に配布し、本学部のITに対する取組状況を広報するなど一定の役割を果たしてきました。今後はWebでの情報発信の重要性が高まるので、Webコンテンツの充実を図っていきたいと思います。また、学内のポータルサイト構築には、学生のボランティアによる協力が不可欠なので、教育的観点からは学生の自主性、提案を尊重する意向です。ジャーナルとWebの充実のために一層の御協力と御支援を賜れば幸甚です。